

フィデル・カストロ追悼特集



写真・村田泰夫

フィデル・カストロ元キューバ国家評議会議長が2016年11月25日、死去した。カストロ元議長が記した足跡はまことに絶大で、その影響は、キューバはもとより世界全体に及ぶ。元議長はいかなる人間だったのか、そして、元議長がその生涯を通じて実現しようとしたものは何だったのか。カストロ時代が幕を閉じたのを機に、改めて考えてみたい。

2006年5月1日メデー式典。これが最後のメデースピーチとなった。

人民を肥やしにした絶対的権力者

フィデル・カストロの「英雄の生涯」

伊高浩昭 ジャーナリスト

1959年元日のクーバ革命は、20世紀ラテンアメリカ（ラ米）最大の出来事と位置づけられてきた。その革命戦争を指揮した革命家フィデル・カストロ＝ルスが2016年11月25日、90年の「英雄の生涯」を閉じた。それから3ヶ月、筆者は、世界史にその名が深く刻み込まれた革命家フィデルの「存在の重さ」を考え続けている。本稿は、その中間報告のようなものだ。（以下、クーバを「玖瑪」ないし「玖」で表す）

フィデルの人間性

フィデルは、スペイン・ガリシア州出身の移民で、一代で豪農となった父アンヘル・カストロの2人目の妻リーナ・ルスを母として1926年8月13日生まれた。東部の現オルギン州マヤリー市近郊のビラーンという農村に豪壮な生家（復元）が史跡として保存されている。裕福な家庭で何不自由なく育ったフィデルは物欲に乏しく、だから腐敗しなかった。それが長期政権維持を可能にした一因だった。

姉、兄、本人、弟ラウール、妹ファーナ、妹、妹の七人兄弟姉妹だが、存命なのはラウール以下4人だけになった。政治的思考に長けていたのはフィデル、ラウール、ファーナの3人で、兄弟は革命家になったが、フィデル

と同じくらい気性が激しく、フィデルとは違って商魂の逞しいファーナは革命後、反革命に転じてCIAの協力者になり出国、今はマイアミで癌と闘いながら静かに余生を送っている。彼女の商才が資本主義体制への訣別を許さなかったのだ。

フィデルらきょうだいは、父アンヘルが初婚の妻と離婚するまでは庶子だった。フィデルは大学生時代にミルタ・ディアスバラルトと結婚し長男フィデリートを儲けたが革命後に離婚。後年36歳の時、17歳だった美貌のダリア・ソト＝デルバージュを見初めて同棲、5人の息子が生まれた。だが当時、フィデルには革命戦争中からの同志セリア・サンチェスという聡明な女性が常に身近にいた。フィデルがダリアと結婚したのは、セリアが死んだ1980年1月の翌月だった。5人の息子は庶子から嫡子になった。この境遇は、少年時代のフィデルらカストロきょうだいとよく似ている。

フィデルには2度の結婚で生まれた計6人の息子がいるが、他に認知された庶子3人がおり、さらに2人ぐらい庶子がいるとされる。美男子で長身のフィデルは魅力あふれる天性のマチョだった。ハリウッドの有名女優ら美女たちとのロマンスも数知れない。フィデルの渾名は「カバージョ（馬）」。大きな体と長顔と「馬力」故だった。それだけに同性愛を毛嫌いし、差別し弾圧した時期があった。だが男たちをも惹き付けて放さない冒険家、勇者、覇者、革命家として人間味に富んでいた。同時に動物的本能を備えた権謀術数家として恐れられた。

フィデルは勉強家で、暗記力、記憶力が人一倍優れて

いた。数字へのこだわりは執拗だった。聖書、ギリシャ神話、世界文学、歴史、思想、戦略論、経済学、英雄伝などを読みあさり、それが並外れて雄弁な弁舌に現れた。だが文章執筆はさほど巧みではなく、文章家だったチェ・ゲバラと好対照だった。

最高指導者だった間は、共産党機関紙グランマの事実上の編集主幹で、特に自分がぶった長演説を印刷前に修正するのに淫していた。演説を聴いて記事にすると、翌日のグランマに発言と異なる文言や数字が載ることがしばしばだった。引退後はグランマに「省察」というコラムを書いていた。執筆スタッフを動員しての作業だった。フィデルの偽らない素顔を最もよく知ることができるのは、フアーナ・カストロ著『カストロ家の真実』（2012年、中央公論新社）だろう。



気宇広大な対外政策

フィデルは少年時代にアレクサンドロス大王、カエサル、ナポレオンらの伝記を読みあさり英雄主義を身につけ、これで自身を励まし、大人物になることを夢見た。革命で政権を握るや、小さな島国の権力者であるだけでは物足りなくなり、世界的な革命家の地位確立に勤しんだ。「ラ米同時革命」を掲げ、地元ラ米のほぼ全諸国のゲリラを支援、また玖瑪人ゲリラを派遣した。世界帝国・米国を意図的に怒らせ、巨人ゴリアテの米国がその罠にはまったことから、「抵抗するダビデの玖瑪」の存在はいやが上にも膨らんだ。

1961年4月フィデルは、米軍の傭兵部隊をコチーノス湾ヒロン浜で撃破するや、気宇広大となり、世界的英雄の地位を目指す野望実現に向かって邁進する。フィデルは同年、フランス軍相手に独立戦争を戦っていたアルジェリアに医師団を派遣、その後、軍事顧問団を送り込んだ。同国を基盤に玖瑪はアフリカ諸国に外交回路を開いた。アジアでは対米戦争を戦うヴェトナムを支援、固い絆を結んだ。

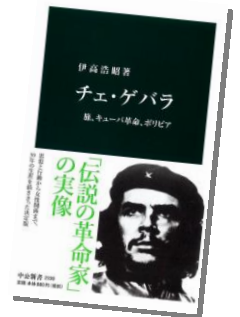
60年代後半ハバナに「アフリカ・アジア・アメリカラティーナ三大大陸人民連帯機構」(OSPAAAL)と「ラ米連帯機構」(OLAS)を置き、3大陸首脳会議を開いた。東西冷戦、米ソ対決、米ソ平和共存、玖ソ対立、中ソ対決、玖中疎遠、第三世界、非同盟運動などを時代背景として、フィデルは「米帝国主義と戦い続ける世界革命運動の指導者」の地位に上り詰めた。

その勲章が1979年9月の非同盟諸国運動議長への就任だった。同年7月、玖瑪革命路線に沿ったニカラグア・

サンディニスタ革命が勝利、フィデルの非同盟議長就任に花を添えることになる。ニカラグア革命政権は、レーガン米政権が80年代に仕掛けた反革命の内戦で疲弊、ダニエル・オルテガ大統領は90年に野に下ったが、21世紀に大統領選挙を経て復活し、現在連続3期目にある。

チェ・ゲバラのコンゴ内戦参戦と、ボリビア革命を目指したゲリラ戦は失敗したが、フィデルのアンゴラ戦争介入は成功。玖瑪軍は80年代末、当時の南アフリカ白人政権の侵略軍を撃破。南ア植民地ナミビアを独立に導き、南ア白人政権の崩壊とマンデラ黒人多数派政権の誕生を促進した。これはフィデルの対外政策最大の成果として国際社会から認められている。

フィデルの英雄主義は確かに花咲いたが、その陰で半ば自らの意志で半ばフィデルの狡猾さによって犠牲になったのがゲバラだった。ゲバラについては拙著『チェ・ゲバラ=旅、キューバ革命、ボリビア=』（2015年、中公新書）を参照されたい。



忘れてはならないのは、フィデルの革命支援がラ米に「変革は可能だという政治的希望」を与えたことだ。これが69年10月のベラスコ・ペルー軍事革命政権登場、70年9月のサルバドル・アジェンデ社会党首のチリ大統領選挙勝利と同年11月のアジェンデ社会主義政権誕生などを招来した。そして、アジェンデ政権は軍事クーデターで崩壊したが、その「複数政党制自由選挙」主義はラ米に伏流水として流れ、ベネズエラの故ウーゴ・チャベス大統領らが主張した「21世紀型社会主義」となって地表に甦ることになる。

フィデルが国際的な英雄になったことで玖瑪が実物の何十倍も大きくなり、米国は革命体制を潰すことができなくなった。もちろん革命初期の外資接收、農地改革、貧者救済、教育・保健制度、国防・治安維持、指導部確立など一連の政策が革命体制を固め、揺るぎなくなったのが最大の安定要因だった。特に精神の健康（教育）と肉体の健康（保健）の両面を保障したことで、反革命の煽動に惑わされない人民を創ったのが最も重要な要因だった。

フィデルがベネズエラのチャベスと戦略的同盟関係を結び、ベネズエラ原油が潤沢に入るようになって、革命体制は21世紀に延命した。敵対政策では打倒できないと悟ったバラク・オバマ前米大統領は、玖瑪革命体制を初めて認め、54年半ぶりの国交再開に踏み切った。

経済建設に失敗

フィデルの物欲の乏しさは商売向きでないことを意味した。フィデルの経済運営は「武家の商法」で空転、経済建設は失敗した。1991年末まで30年間続いたソ連援助がなかったら、長期政権維持は不可能だった。72~76年の政経両面のソ連化で玖瑪は80年代、発展途上国としては最も平等性の高い豊かな生活を謳歌することができた。

89年11月のベルリンの壁崩壊と同時に「経済相互援助会議」(コメコン)が雲散霧消し、同年12月米ソ首脳はマルタで東西冷戦終結を宣言する。ソ連は91年末に消滅、玖瑪経済は93年、どん底状態に陥った。フィデルは90年に「平時の特別期間」という名の非常事態を設定していた点で先見の明があったが、人民は極度の耐乏生活を強いられた。

玖瑪は革命体制延命のため背に腹は替えられず、「特別期間」を隠れ蓑に、敵国通貨だった米ドルの合法化、外資導入、自営業認可、観光の基幹産業化などに実験的に着手した。その指揮を執ったのは、革命軍相ラウールだった。経済は94年から地味ながら成長に転じた。ラウールは2008年2月、正式に政権に就くや、90年代の実験を踏まえて、今日に続く市場原理導入による経済改革に着手する。

フィデルが病気で倒れ正式に政権を退くまで49年も最高指導者であり続けることができた直接的理由は、数ある権力闘争で勝ち続けたことだ。革命戦争中はマエストラ山脈で指揮を執ったが、都市や農村など山岳地帯でない「平地」からの兵站・情報支援がなかったならば戦争勝利はあり得なかった。フィデルは「平地」組を抑え込み、似非革命派を追放、指導部内の穏健派を弾圧、人民社会党(PSP=共産党)と大学生らの「革命幹部会」をねじ伏せて、1965年10月の新生玖瑪共産党(PPC)結党に漕ぎ着けた。

革命戦争勝利の最大の功労者の一人は、58年半ばマエストラ山脈に大攻勢をかけ決戦を挑んだバティスタ政府軍の撃破に著しい功績のあった故ウベール・マトスだ。フィデルは、共産党(PSP)の革命政権への浸透を非難したマトスに「反革命・反逆罪」で禁錮20年を科し投獄した。マトスは刑期を全うし、マイアミで死去した。フィデルはマトスを一罰百戒主義で長期刑に処し、見せしめのため「巖窟王」にしたのだ。

フィデルは68年8月、ワルシャワ条約機構軍(実質的にはソ連軍)がチェコスロヴァキアを侵略すると、国際社会主義を守るためやむを得ない措置として支持、こ

れを契機にソ連と蜜月時代に入った。これを受けて共産党(PPC)が芸術を管理・監視する「社会主義リアリズム」を導入、70年代前半は「灰色の5年間」と呼ばれた。その象徴的な犠牲者が裁判にかけられた詩人のエベルト・パディージャだった。サルトルをはじめ多くの知識人が玖瑪革命体制支持を取り止めた。

フィデルは61年末に「マルクス・レーニン主義者宣言」をする。だがフィデルの共産主義は独占的権力維持と共産圏からの援助獲得のための便宜的な手段だった。フィデルには、マルティ思想と反帝国主義に根差す民族主義が大切だった。自分が「玖瑪人民を代表する絶対善」と頑迷に信じ、その「善」を施した。

資本制諸国のメディアは「独裁者」の烙印を押し、フィデルは死と同時に必要以上かつ不公平・不公正に攻撃された。だがフィデル体制があったからこそ革命玖瑪が存続したのであり、これを評価するならば、その前提条件としてフィデル体制があった事実を否定し去ることは不可能だ。フィデルが経済建設に成功していれば、これほどの「独裁攻撃」はなかっただろう。

類い希な権謀術数家

1980年代半ばソ連に登場したゴルバチョフ政権は「ペレストロイカ」(刷新)と「グラスノスチ」(透明化)を掲げ、ソ連体制の改革に着手する。その改革の波は改革圧力となって中国にも及び、89年6月北京で天安門事件が起きた。驚愕したフィデルは体制存続の危機を察知、アルナルド・オチョア革命軍中將ら高官4人を「麻薬取引に関与し国家を危険に陥れた」として「反逆罪」で銃殺刑に処した。

これは麻薬取引関与でフィデルを告発しようとする目論んでいた米政府に先手を打った恐怖の荒療治だった。米政府は麻薬関係の告発ができなくなり、玖瑪国内の不满派も動きが取れなくなった。当時の内相も投獄され、謎めいた獄中死を遂げた。麻薬問題は70年代末に玖瑪に入ってきた。慢性的な財政赤字に苦しむラ米諸国の政府は皆、コカイン資金の魔力に惹き付けられていた。

ソ連圏社会主義の崩壊と「特別期間」に現れた貧富格差は「革命の平等神話」を破壊した。庶民の心には空洞が生じた。それを埋めるためフィデルは、「反共の法王」として知られたポーランド出身の法王ヨハネ=パウロ二世を98年に招いた。

来訪に先立ちフィデルは指導部に、「法王の反共主義を理解せねばならない。ポーランドの共産主義は民衆から生まれたのではなく外部から押し付けられたものだからだ。またカトリックは歴史的にスウェーデン、プロシア、

ロシアに対するポーランド人民の認同（アイデンティティー）の砦だった。法王に同意できない場合、反論してはならない。彼は我々の賓客なのだ」と言い含めた。

フィデル最大の政治的作風は、反米主義で国内をまとめる手法だった。だから反米を唱えるための具体的材料が常に必要だった。98年9月、マイアミーで玖瑪を武力攻撃する可能性のある反玖勢力の動向を探っていた玖諜報機関員5人がスパイとしてFBIに逮捕された。

これはフィデルがご丁寧にもFBIをハバナに招き、マイアミーでの機関員による秘密捜査の報告書を手渡したことに起因する。フィデルは「玖瑪を攻撃する可能性のある組織をFBIに取締ってもらいたい」と伝えたが、この時点でFBIが玖諜報機関員らを一網打尽にする成り行きは容易に予測できた。

これについては、イグナシオ・ラモネ著『フィデル・カストロ＝みずから語る革命家人生＝』（2011年、岩波書店）の下巻の巻末解説を参照されたい。

フィデルは5人が逮捕されるや人民を大量動員し「5人の英雄奪回」という反米闘争を展開、これを世紀末から新世紀初頭にかけての国内引き締め用に用いた。フィデルが笛を吹けば、権力機構と人民は踊らざるを得ず、一日に100万人を動員するのも可能だった。だがフィデルの教育政策のお蔭で思考能力を持つ人民は、動員される度に「子供扱いされている」と感じていた。不満を殺し沈黙することができない者は、反逆すれば弾圧された。自由を求めれば、フロリダ海峡を小舟で越える冒険を選ぶしかなかった。

「5人の英雄」全員が帰国するのは、2014年12月17日の玖米首脳による国交正常化合意発表の日まで待てねばならなかった。処刑されたオチョアラ4人と「5人の英雄」は、フィデルの権力維持のため生け贄にされた典型的な犠牲者だったと筆者は見る。

フィデルは世紀の変わり目に何度も経済会議を開き、国際通貨基金（IMF）、世界銀行などのエコノミストを招いて議論するのが好んだ。フィデルは新自由主義をこっぴどく批判し、「人類共通の幸福（ビエン・コムン）」を目指すべきだと主張した。自然破壊や多くの貧者を生みだし、不幸を招いた資本主義の「死」に対する「生」を強く訴えていた。

一方で蔓延しつつあった腐敗を取締まるため、はみ出し者の若者を集めて「社会的労働者」に仕立て、もぐら

叩きのような焼け石に水の反腐敗闘争を展開した。敢えて形容すれば、この若者たちは気まぐれな紅衛兵だった。このような強圧手法も厭わなかった。

フィデルは06年7月重病で倒れた時も権力を手放す気はなく、ラウールにフィデル派5人、中立派1人を加えた計7人の集団指導部に政権を「暫定委譲」した。だが体力回復が不可能と悟り、ラウールに08年権力を譲った。この政権交代は遅すぎたが、玖瑪経済立て直しのためには天佑だった。フィデルが倒れた時、アベル・プリエト文化相は「外国からの侵略の可能性」を糾弾する著名な国際知識人の署名を急遽集め、400人が署名した。フィデルが指示したのでなければ、ラウールの指示によるものだったはずだ。

フィデルは引退後も国際政治面の発言を続け、ノーベル平和賞受賞にかすかな望みを懸けていた。革命家、英雄、権力者フィデルは、絶対的権力者であったが故に人道主義者でなければならないと自覚していた。「ヘンリー・リーブ国際医療派遣団」創設一つをとっても明らかだ。「より良いもう一つの世界」を希求し努力するアルテルムンディスタでもあった。だが類い希なる政治的動物で、最後まで野心家だった。

2016年8月に90歳になってからのフィデルは、ハバナ西部シボネー地区の自邸にイラン、ポルトガル、日本（安倍首相）、中国、アリジェリア、ヴェトナムの首脳を迎え会談した。11月15日にヴェトナムのチャン・ダイ・クアン国家主席と撮った写真がフィデルの公表された生前最後の写真となった。

死して貢献

ラウールは2016年11月25日、テレビとラジオの臨時ニュースに登場、「私は深い悼みをもって現れ、我らが人民と我らがアメリカ（米州）および世界の友人たちに、本日午後10時29分、玖瑪革命の最高司令官フィデル・カストロ＝ルスが死去したことを報告する」と沈痛な面持ちで伝えた。この命日は、グアンマ号がメキシコのトウспан港を出航した記念日と奇しくも重なった。26日から9日間の国喪が宣言された。フィデルの遺体は遺言により火葬された。

オバマ米大統領は、「この瞬間、在玖・在米の玖瑪人は、フィデル・カストロが個人、家族、国の方向を変えてしまったことを思いつつ強い感慨に浸っていることだろう。歴史は人民と世界に彼が及ぼした巨大な影響を裁くだろう」と述べた。1953年7月26日のモンカーダ兵営襲撃で逮捕されたフィデルは裁判で自己弁護し、その締め括りに「歴史は私に無罪を宣告するだろう」と言った、こ



の名文句をオバマは踏まえて「裁くだろう」と指摘したのだ。

11月29日革命広場で「人民葬」と呼ばれる国葬が挙行された。広場一帯を埋め尽くした人民と、ラミ・カリブ18ヶ国首脳、アフリカ6ヶ国首脳、ギリシャ首相、アジア諸国代表ら要人多数が参列した。米国首席はオバマ大統領の懐刀ベン・ローズだった。

ラウールは、兄でなく同志としてのフィデルに向けて弔辞を読んだ。「フィデルは、貧者の貧者による貧者のための社会主義革命を指導した。玖瑪革命は反植民地主義、反アパルトヘイト、反帝国主義、人民解放、人民の尊厳のための戦いの象徴となった。彼の響きわたる言葉は今日この革命広場で響きわたっている。遺骨の前で不朽の模範に従い続けることを誓う。愛するフィデル、今ここに国家の英雄ホセ・マルティ像と共にある。この場所で半世紀以上に亘り、並外れた苦難の時に集い合い、我々の象徴（マルティ像）を尊びつつ、重大な決定に関し人民に諮問した。まさに我々が勝利を記念したこの場所で我々の殉死者、戦士、英雄的人民と共に〈勝利まで必ず〉とあなたに向けて叫ぶ」。

マイアミで暮らす実妹ファーナ・カストロは、次のように語った。「兄の死は悼むが葬儀のため帰国することはない。私は（1964年の出国後）帰国したことも帰国する予定もない。私たちは政治的理由で離れ離れになったが、私は肉親としての心は痛みつつも維持しており、肉親の死を痛むのは当たり前のこと。多くの玖瑪人が自由のために闘う場を求めて出国したように、私も亡命し、マイアミに来た。私が立場を変えることは決してない。そのために痛みと孤独という高い代償を払ってきた。私は、いかなる人物の死にも喜んだことはない。肉親であれば、なおさらのことだ。フィデルの妹として肉親の死んだ瞬間を生きている」。ファーナは、フィデルの死に大喜びしたマイアミ玖系社会の「ヘイト歓喜」を批判していたのだ。

骨箱は沿道から見えるように軍用車に積まれ、11月30日ハバナを出発。フィデルが1959年1月、サンティアゴからハバナまで辿った凱行の行程を逆に通って、12月3日、サンティアゴに到着した。市内のアントニオ・マセオ革命広場で告别式が挙行され、ラウールが告別の言葉を述べた。

「我々は玖瑪人民の愛国的信念、規律、成熟に支えられて、祖国と社会主義の防衛を誓う。何百万人も人民が革命の指導者フィデルの思想継承者として革命護持を誓った。フィデルはモンカーダ兵営襲撃、グランマ号遠

征、革命戦争、ヒロン浜侵攻部隊撃破、識字運動、社会主義革命宣言、ミサイル危機克服、アンゴラ戦争勝利などを達成した。〈平時の特別期間〉にはGDPが34.8%下落し長時間停電に苛まれた。敵の間近でこれだけ抵抗能力を持つ人民はほとんどいない。我々はいかなる障害をも克服してゆく」。

国家評議会はフィデルの遺志で個人崇拜を禁じ、これを受けて人民権力全国会議（国会）は立法化した。

納骨式は12月4日午前6時50分から約1時間に亘って、サンティアゴの聖母エフィヘニア墓地で執り行われた。ラウール以下の革命軍、共産党、政府、国会の要人らが勢揃いし、ダリア・ソト＝デルバージェ未亡人、息子ら遺族、外国人招待客40人らが参列した。

フィデルの墓は、マルティ廟の近くに設けられ、高さ4メートル、花崗岩製の丸みを帯びた白亜の墓で、後方にはモンカーダ兵営襲撃殉死者の廟がある。周辺には革命戦争戦死者、アンゴラ戦争戦死者らの廟も並ぶ。この位置関係には、「マルティ思想に基づいてモンカーダに始まる革命闘争を率い勝利に導いたフィデル」という意味づけがある。

国歌演奏と礼砲21発に続き、骨箱は墓石の中央の横穴にラウールの手で納められた。ラウールは嗚咽を堪えることができなかった。その墓穴に被せられた青い正方形に近い大理石の板には、黄金色の文字「フィデル」。これが唯一の墓碑銘だ。墓の右側には、2000年5月1日（国際労働者の日）にフィデルが唱えた「革命概念」の文字を刻んだ文字盤が建つ。謙虚・正直・愛他主義などを謳う「概念」を読むフィデルの録音の音が流れた。

葬儀が終わるや政府は、フィデル思想を国民思想として定着させる一大運動を全国で展開。2017年元日の革命58周年記念日に続く2日の革命広場での革命軍と人民戦士の行進にも、フィデル思想と若い世代の結びつきを強める狙いが込められていた。

フィデルは、若者の政治的無関心が反革命故でなく、自分の人生を自分の意志で築きたいという個人主義によるものだと理解していた。フィデルには後継者ラウールがいた。だが自分の後に「ラウール」を持たないラウールは、50代半ばのミゲル・ディアスカネルに政権を引き渡さねばならない。そのため次期政権を支えるべき若い世代の政治的育成が不可欠だ。

1月末のマルティ生誕164周年記念日前夜の松明行進もとりわけ大規模に全国で展開され、若者が主導役を任された。マルティ思想はフィデル思想に結びつけられ、若い世代に植え付けられる。これをもって帝国主義（米

国)と対峙する思想戦略がある。1月28日のマルチ誕生日には、サンティアゴのマルチ廟とフィデルの墓の両方に荣誉礼が捧げられた。フィデルの墓には2ヶ月間に15万人が参拝した。観光名所にもなっている。

筆者の思い出

筆者が大学1年だった1962年10月、玖瑠核ミサイル危機が起きた。「英字新聞講読」という授業で、ジャパタイムズ紙を読みながら危機の推移を辿っていた。これが意識的、組織的に玖瑠情勢に取り組んだ最初の重要な経験だった。以来55年、ジャーナリストになって50年、フィデルは「強迫観念」のように脳裡に居座り続けてきた。

玖瑠国外の左翼、進歩主義者、知識人、サロン革命家らは、「代理革命」を託したフィデルを礼讃した。だが玖瑠人民は「尊厳」を与えられたが「胃袋と精神の空腹」に苛まれた。この「内外落差」を、玖瑠人でないジャーナリストの筆者は常々考えてきた。フィデルを全体的に捉え、「功罪」を総合的に判断するのは簡単なことではない。

思い出は数多いが、95年12月フィデルが初の来日を果たした折、「東西冷戦終結後の社会主義の存在価値」を質問して激怒させたことが印象深く残っている。フィデルの死で、筆者は「重い取材対象」から解放されたと言えるかもしれない。

フィデルに最後に会ったのは2010年9月、船上講師として乗ったピースボートがハバナに入港、船客とともにハバナ西部の会議殿堂に招かれた時のこと。日本人集団との2時間半もの会合を終えたフィデルは一旦演壇を離れたが、戻ってきて場内に向かって日本式にちょこんと頭を下げた。「好々爺ぶり」を一瞬垣間見た筆者は、新鮮な驚きを禁じ得なかった。

筆者が期待するのは、コンゴ遠征中のゲバラがフィデルに書いた書簡、プラハ滞在中のゲバラの日記などフィデルが公表しなかった重要文書が早く公開されることだ。玖瑠革命の真の研究は、ラウールの死後、機密文書類が公開されるようになれば、その時始まることになるはずだ。

いadak ひろあき

ジャーナリスト。東京都出身。1967年からラテンアメリカ(ラ米)全域を取材。元共同通信記者。2005年から立教大学ラテンアメリカ研究所「現代ラ米情勢」担当講師。ラ米、スペイン、沖縄、南アなどについての著書多数。最新の著書は『ラ米取材帖』(2010年ラティナ社)。最新の翻訳書は『フィデル・カストロ みずから語る革命家人生』(上下、2011年岩波書店)。

★月刊誌5月号(4月刊行)に、クーバとトランプ政権との関係や、クーバ政治の近未来を分析した伊高さんの記事が掲載される予定。



巨星墜つ、フィデル・カストロ氏が死去

共産陣営では稀に見る 清廉さが長期政権を生む

岩垂 弘 ジャーナリスト/キューバ友好円卓会議

キューバのフィデル・カストロ前国家評議会議長が2016年11月25日、死去した。90歳だった。20世紀から21世紀にかけて世界の共産主義・社会主義運動を率いたレーニン、スターリン、毛沢東、ホー・チ・ミン、金日成、チトーらの亡き後、ただ一人残っていた革命家が姿を消した感じで、まさに「巨星墜つ」の感を禁じ得ない。カストロ前議長は実に57年間の長期にわたってキューバに君臨したが、それを可能にしたのは、共産主義・社会主義陣営では稀に見る政治指導者としての清廉さと無私が、キューバ国民に支持されてきたからではないか。

ゲリラ戦でバチスタ政権を倒す

カストロ氏は、1953年、26歳で、同志とともにキューバのバチスタ政権打倒の武力闘争を起こす。元キューバ大使の宮本信生氏の著書『カストロ』(中公新書、1996年)によれば「米国に隣接し、また砂糖産業の影響をもろに受けたキューバは、二〇世紀中葉、国内的には政治的腐敗、不正義、不平等、対外的には政治的・経済的対米従属・屈辱を特徴とする、『腐った、さらに腐りかけた』社会であった。そして、そこにカストロ・キューバ革命を生む温床があった」という。

この時の武装蜂起は失敗し、カストロ氏も捕らえられて裁判にかけられ、15年の禁固刑を宣告される。が、蜂起した人たちに恩赦を与えるべきだとの世論が高まり、1955年、釈放される。その後、カストロ氏はメキシコに移り、ここで再度の武装闘争の準備を進め、1956年、氏とチェ・ゲバラら同志82人を載せたヨットがメキシコを出港、キューバの東海岸に着く。ところが、海岸にはバチスタ軍が待ち構えていて、カストロ側は多数の犠牲を出し、残ったカストロ氏らはシェラ・マエストラの山中に逃げ込んだ。

しかし、この山中でゲリラ戦を展開しながらバチスタ軍と戦い、ついに、1959年、バチスタ大統領がドミニカへ脱出、ここにカストロ氏らのキューバ革命が成功する。

革命成功後、カストロ氏は、首相、共産党第1書記、国家評議会議長とその時々で肩書きは変わったが、常にキューバの最高指導者であり続けた。2008年に国家評議会議長を弟のラウル・カストロ氏に譲り、第一線を退いた